

遠く福島へ、南相馬市と浪江町へ

福島第一原子力発電所の事故は、日本の原子力発電事業で起きた最悪の事故であり、それは6年経った今も人の住めない場所を福島県沿岸(浜通り)に斑点のように残したままにしている。以下の文章は、2013年4月、飛鳥高校の生徒とともに福島県南相馬市と浪江町を訪ねた時の記録である。

飯館村を通り原町へ

4月1日朝、2年生のG君(3組)とT君(6組)とともに、車で一路福島県二本松をめざした。そこで高速を降り、県道で阿武隈山地へと分け入る。途中、福島市役所飯野支所の建物でトイレを借りた。その建物内にこの先の飯館村の仮庁舎が間借りしていた。飯館村はこの時も居住制限区域となっており、昼間の通勤は認められるものの、夜間の寝泊りは禁止されていた。間もなくその飯館村を西から東に横断した。人気のないその街に異様さを感じた。その後しばらく、山道を走り抜け、桜も芽吹き始めた浜通りへと下って来た。南相馬市の原町区に入ったのだ。見えて来た常磐線を高架でまたいだところで、小児科医院を経営する知人のHさん夫妻を訪ねた。



H夫人と生徒、そして私

夫妻は突然の我々の訪問にも、嫌な顔をせず歓迎してくれた。震災後、原発を

恐れ物流がとだえ、必需品を買うのも困難だったこと。市から配られた「線量計」を見ながら、今も不安の中で暮らしていることなどを聞かせてくれた。夕刻となったので、訪問のお礼を言い、そのまま今夜の宿となるビジネス旅館へと向かった。街には開いている店もあったが、若者が避難しているせいか、客のいないマクドナルドは閉じられていた。

旅館では今回も台湾からの団体だと言うボランティアの一行と出くわした。その他、復興事業でここに連泊している男性陣にもお目にかかった。G君とT君は、昨年度まで担任をしていたクラスの生徒だったため、そのクラスのこと話で盛り上がった。

浪江町を往復

2日朝、強風と大雨の中、原町区の「道の駅」で会ったのは、『復興浜団』と名乗る上野敬幸さんら10人ほどの団体だった。私たちは、この日浜団が予定する海岸での行方不明者の捜索に参加する予定だった。しかし、激しい雨が降り続き、荒天で活動は中止。代わりに4月に立ち入り禁止が解除されたばかりの浪江町を見ようと言うことになり、そのまま国道6号を南下した。

雨は一向にやまないが行く手の視野は確保されていた。30分ほどで浪江町の中心、幾世(きよ)橋の交差点に達した。左折し検問を抜けると、浪江町の漁港「請戸(うけど)」への道となる。請戸川を越えると、そこには写真で示した荒涼とした光景が今も広がっていた。震災前の請戸の人口1200人。その一割が、帰らぬ人となった。四つ角に備えられていた卒塔婆や生花を

前に合掌した。建物だけが残った請戸小学校の姿が哀れだった。



請戸集落の中央に立つ卒塔婆 奥に残された船も

降り続く雨の中、行き来た道を南相馬へと戻る。原町区萱浜(かいばま)にある上野さんのお宅で休憩・座談することになった。萱浜は文字通り海岸から奥へと広がる平坦な土地で、津波をかぶった農地に建物が散見される場所だった。そこに二棟並んで、上野家の新旧の住まいが建っていた。杉林を背にして、左は1階が津波の水流で打ち抜かれた元のお宅。その右の新築なったモダンな外観の住まいに、我々一行が入って暖をとった。

上野さんの新居にて

上野さんが主宰する『復興浜団』の活動は、今も行方不明の人々の手がかりを捜すこと。それが人骨であろうとも、とにかくその人の痕跡を追うことだった。上野さんは、その家族四人を津波で失った。震災当日、海岸から500m離れた旧宅を津波が襲った。家にいたご両親、そして8歳の長女、3歳の長男が流された。上野さんは必死の思いで自宅周辺と海岸一帯とを探し回った。数日後、長女と母親とが遺体となって発見された。しかし、今も幼い長男と父親とは行方不明のままだ。「原発がなければ」と今も思う……。

萱浜は福島第一原発から20kmほどしか離れていなかった。この緊急時、政府は

「屋内退避」を指示。そのため他の地域には続々と入って来た警察や自衛隊の援助は届かなかった。上野さんは警告を無視して自力で捜すしかなかったのだ。「原発のために、救えた命が救えなかったのでは」と今も思っている……。

当時お腹に胎児を抱えていた上野夫人は、その後避難先の病院で女の子を出産。新居の居間では、その赤ちゃんを抱いた夫人が、優しそうな眼差しで子を見つめていた。上野さんに「是非手を合わせて行ってくれ」と言われ、隣の旧居に入ってみた。玄関を上がった所には、津波で犠牲となった四人の遺影と子どもの形見であるおもちゃなどが今も置かれていた。そこで合掌した。

上野さんたちは、「捜してくれ」と依頼があれば出かけて行き、二人の分もあわせて捜し続けている。決して諦めずに。



一階が津波に打ち抜かれた上野さんの旧居

帰り道は行き来た道をそのまま帰ることになった。途中、川俣町で地元特産の地鶏のラーメンを食べて遅い昼とした。それにしても南相馬は遠かった。常磐道が開通すれば日帰りでも十分な距離のはずだ。一日も早く放射能汚染が除去され、避難区域が解除されることを、現地の人共々思ったものである。